

今年 は 戦 後 80 年

ハチオシ!

未来へつなぐ 平和の願い

令和7年(2025年)は、終戦から80年という節目の年です。この機会に、過去の戦争を振り返り、その記憶を心に刻み、平和な社会について考えてみませんか?核兵器の脅威や戦争の悲惨さは、決して忘れてはならないものです。市民一人ひとりが戦争や核兵器のない、平和な社会の大切さを認識しましょう。

問 人権政策課 ☎924-3843 FAX924-0175 📠1019548

戦時中の八尾の様子

八尾には陸軍大正飛行場(現在の八尾空港)などの軍事施設があり、これらを狙った空襲により周辺の建物や住民も被害を受けました。



1945年7月10日、堺市上空から東方向に飛行する米軍B29の編隊(山本達也氏提供)。写真左上の赤丸が大正飛行場(現在の八尾空港)



道路脇に掲示された告知板「非常時に於ける救援道路 航空機離着陸予定地 大阪府」(西辻豊氏提供)(現在の府道八尾枚方線)

平和を未来へ!「親子記者」体験

長崎を訪れて被爆者や平和関係施設を取材する「親子記者」事業に、八尾市からも親子が参加。体験談はP4-5に掲載しています!



白山穂波さん



中山翔太さん



小枝叶愛さん

今月の市民モデルさん

子どもたちは2人とも「こんにちは赤ちゃん」に載ったことがあるので、市政だよりに載るのは今回が3回目です。初めてのチャレンジでしたけど、子どもたちも楽しんでくれて。普段できない経験を家族でできて、本当にうれしかったです。



八尾市の非核・平和への歩み

平和を守り、尊ぶ心を育てていくため、本市ではさまざまな取組みを続けています。ID1010820

1983(昭和58)年度

●八尾市非核・平和都市宣言 ID1009624

非核・平和都市宣言とは、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を願い、非核三原則の遵守を求める立場を表明するものです。平和であることは、市民生活を守るうえでの前提です。その平和への願いとたゆまぬ努力の誓いとして、非核・平和都市宣言を行いました。

1986(昭和61)年度

●日本非核宣言自治体協議会に加盟 ID1010818

日本非核宣言自治体協議会は、人間らしく生活できる真の平和実現に寄与するため、全国の自治体に核兵器の廃絶、平和宣言を呼びかけるとともに、自治体間の協力体制を確立することを目的として活動しています。



1993(平成5)年度 宣言10周年

●平和モニュメント設置(本町1 市役所前庭)

市民投票で選ばれた八尾市の平和のシンボル。未来を創造する若い力と強い意志が平和と繁栄への道しるべとなることを願って設置されました。

『光の道しるべ』作者 山本成男氏

「人々の平和への想い」を象徴し、未来へのメッセージを託すため、手と手の重なりが、「人と人との和」となり、輝く未来に向け伸びゆくさまをイメージしています。



2003(平成15)年度 宣言20周年

●「長崎被爆体験講話」を実施

長崎原爆資料館の資料展示や、被爆体験者による市内小中学校での講話事業がスタートしました。現在も毎年、14校の小中学校で実施しています。



2013(平成25)年度 宣言30周年

●記念誌「戦争の記憶 伝えたい平和の大切さ」を発行 ID1010819

八尾市非核平和都市宣言30周年を記念し、市内に残る戦争関連施設などを紹介する冊子を作成。戦争体験者の証言や当時の様子も合わせて紹介しており、身近なところから平和の大切さについて考えてもらうものになっています。この冊子を活用し、毎年「戦争遺跡めぐり」事業が行われています。

宣言30周年記念誌
「戦争の記憶 伝えたい平和の大切さ」



2023(令和5)年度 宣言40周年

●宣言40周年祈念事業 平和のつどい 被爆ピアノ 講演会・コンサート

被爆ピアノ管理所有者・調律師であり、自身も被爆2世である矢川光則さんによる講演と、八尾市出身のピアニスト・山形昂輝さんによる演奏が行われました。



戦争体験講話 ～知覧が伝える“特攻の記憶”～ ID1019236

特攻の歴史や背景を学び、平和の大切さをあらためて考える機会です。今を生きる私たちがその記憶を受け継ぎ、未来へとつないでいきましょう。

- ・知覧特攻平和会館 講師 桑代照明さんによる特攻隊などに関する講演会(60分)
- ・八尾市在住のシンガーソングライター 氏家 麻衣さんによるコンサート(30分)



日時 8月19日(火)13時30分～15時 会場 文化会館 定員 100人(当日先着)

八尾市
からも
参加!

「親子記者」 体験談インタビュー

八尾市が加盟する日本非核宣言自治体協議会(非核協)では、次世代への平和の継承を目的に「親子記者事業」を行っています。抽選で選ばれた親子が長崎を訪れ、被爆者や平和関係施設取材して『おやこ新聞』を作成するこの取組みに、本市から参加されたご家族にお話を伺いました! ID 1014941

8月9日生まれの私が 長崎で出会った、平和への思い。

— 親子記者事業に参加した経緯を教えてください。

穂波さん: 私の誕生日は8月9日で、長崎に原爆が投下された日と同じです。だから、小さいころから家族で「いつか長崎に行こう」と話していました。令和4年の夏に「親子記者事業」に選ばれ、長崎への取材の旅が実現しました。

— 長崎ではどんな人にお話を聞きましたか?

穂波さん: 13歳で被爆された丸田和男さんと、「Peace by Peace NAGASAKI(ピース・バイ・ピース・ナガサキ)」の金村公一さん、前田真里さんにお話を伺いました。

— 印象に残っていることは?

穂波さん: 丸田さんの声がとても力強く、「語り残さなければ」という思いが伝わってきました。何十年も前の出来事なのに、本当にその場にいるような、タイムスリップしたような気持ちになりました。それだけ当時の記憶が深く刻まれているんだと感じました。

聡子さん: 丸田さんは、有名な「黒焦げの少年」の友人で、同じ中学校に通っていたそうです。それまで私は、あの写真を見るのが怖かったのですが、「友達だった」と聞いて見方が変わりました。娘と変わらない年齢の子が被爆したと想像すると、胸に迫るものがありました。



— 現地で学んだことで、意識に変化はありましたか?

穂波さん: 原爆のことは知っていましたが、実際に長崎に行って話を聞いたことで、平和への思いがより強くなりました。人間だけじゃなく、たくさんの動物の命も奪われていたことにも気づきました。

— 取材の最後には、発表もあったそうですね。

穂波さん: はい。学んだことを自分の言葉で発表しました。大阪から父も応援に来てくれました。

— その後も、長崎とのつながりは続いているそうですね。

穂波さん: 長崎で取材した前田真里さんが、親子記者のことを本にまとめるために私を取材してくれて、3回八尾にも来られました。その際は、私たちが市内の戦争関



白山聡子さん、穂波さん 令和4年度参加

係施設を案内しました。

聡子さん: 市内の戦争関係施設については、親子記者事業の事前学習として学んだのですが、家の近くの道路が戦時中は滑走路だったと知って、本当に驚きました。

— お父さまも地元の歴史に驚かれたとか。

大祐さん: 八尾に長く住んでいても、知らなかったことがたくさんありましたね。家族で学ばさなければならなかった。

— では最後に、いま伝えたいと思っていることは?

穂波さん: 小学生のときは、まわりの友達と原爆の個数について話し合ったりしました。今は中学生になって、「戦争や平和について少しでも興味を持ってもらえたら」と思っています。私自身、長崎に行ったからこそ気づけたことがたくさんあるので、一人でも多くの方が興味を持ってくれたらうれしいですし、自分なりに何かを伝えていきたいです。



長崎まで応援に
かけつけた
父 大祐さん



「知らなかった」から「伝えたい」へ。 広がる学びの輪。

——親子記者事業を知ったきっかけは？

文さん：大阪府のホームページで知りました。「長崎に行けたらいいね」くらいの気持ちだったので、選ばれたときは驚きました。

——参加が決まってからは、どんな準備をしましたか？

文さん：事前取材として、親子で「ピースおおさか 大阪国際平和センター」などを訪れました。

翔太さん：学校では、戦争について深く学ぶ機会があまりなかったので、自分たちの住む地域の戦争と平和について調べました。

——長崎ではどんな人に取材しましたか？

翔太さん：1歳で被爆された橋本富太郎さんと、ひいおじいさんが広島と長崎の両方で被爆した「二重被爆者」である高校生の原田晋之介さんのお2人です。



——印象に残っていることは？

翔太さん：橋本さんが戦後ずっと、体調不良などの後遺症に悩まされていたことが強く心に残りました。原爆の被害はその時だけでなく、今も続いているんだと思いました。

文さん：高校生の原田さんが、語り部として活動している姿にとっても驚きました。地元の高校生が平和祈念式典に出席するなど、長崎では幼いころから原爆や平和について学ぶ環境が整っていて、大阪との違いを感じました。



中山文さん、翔太さん 令和6年度参加

——そうした経験を経て、どんなことを考えるようになりましたか？

文さん：たとえば八尾と長崎をオンラインでつないで、それぞれの地域の子どもたちが戦争の記憶について発表し合えるような機会があってもいいのではと感じました。現地に行ける人は限られているからこそ、地域を越えて交流することに意味があると思うようになりました。

——学んだことを、誰かに伝える機会がありましたか？

翔太さん：夏休みの自主学習として長崎での体験を提出したところ、校長先生に声をかけていただき、全校生徒約560人にオンラインで発表しました。平和について、一緒に考えるきっかけになればと思い伝えました。

文さん：発表の内容をまとめた『報告新聞』も作成しました。非校協のホームページにも掲載していただいています。

——この経験を、今後どう生かしていきたいですか？

翔太さん・文さん：先日も「ピースおおさか」のイベントに参加し、改めて平和について考える時間になりました。本当に貴重な体験をさせていただいたので、「行って終わり」にせず、これからも学び続けたいと思います。



今年も八尾から「親子記者」が長崎へ！ 8月の長崎派遣に向けた思いを伺いました。

——応募したきっかけを教えてください。

克啓さん：今の国際情勢を見ても、平和は当たり前ものではありません。娘が少しでも平和を考えるきっかけになればと思い、応募しました。

——派遣に向けて、どのような準備をしていますか？

叶愛さん：修学旅行で広島に行く予定なので、学校でも平和学習が始まっています。長崎の原爆投下については、図書館で本を読んだりして、自分なりに調べているところです。

——保護者として、どのような思いをお持ちですか？

克啓さん：戦争の悲惨さを知ることで、娘が辛い思いをしないかという心配もありますが、それを乗り越えて今があるという歴史も、あわせて学んでほしいと願っています。

——現地での取材に向けて、意気込みを聞かせてください。

克啓さん・叶愛さん：被爆者の高齢化が進み、直接お話を伺える機会が減っている今だからこそ、しっかり取材し、伝えていきたいと思っています。



小枝克啓さん、叶愛さん
令和7年度参加予定